

A-5

日本語移動表現の直示情報と主体性

—話し手自身の移動と第三者の移動の対照—

石塚政行（東京大学大学院）

1. 導入

本発表では、はじめに、日本語において「話し手自身の移動を表現する場合」と「第三者の移動を表現する場合」とを比べた際、前者の場合のほうが後者の場合よりも、直示情報を表現する頻度が低くなるという予想を提示する。次にこの予想を実験的手法によって検証する。これにより、日本語の移動表現における直示情報の表現頻度の高さが、日本語の「主体性」への選好の高さに基づく（古賀 2016, 2017）という仮説の妥当性を確かめる。

1.1 移動表現の類型論の概要

移動表現の類型論の先駆的研究である Talmy (1985, 1991 など) は、移動事象を構成する意味要素のうち「経路」をどのような文法要素で表現するかによって、世界の言語を2つに分類できることを示した。ある位置から別の位置へ物が移動するとき、その物の占める位置の変化によってある一定の経路が定義される。たとえば (1) が表現する移動では、太郎の位置変化によって定義される、部屋の中を起点、部屋の外を着点とする一定の軌跡が存在する。

(1) a. 太郎は部屋から走って**出た**。

b. Taro ran **out** of the room. (古賀 2016)

経路が文の中核部である主動詞で表される言語は「動詞枠付け言語」と呼ばれ、日本語、ロマンス諸語、セム諸語、バンツー諸語などはこの類型に属するという。たとえば (1a) では「中から外へ」という経路が「出る」という主動詞で表現されている。いっぽう、動詞接辞や不変化詞といった主動詞に付随する要素、すなわち「衛星」で経路を表現する言語は「衛星枠付け言語」と呼ばれ、英語を始めとするゲルマン諸語、スラブ諸語、フィン・ウゴル諸語などはこちらに分類される。たとえば、(1b) では経路を表しているのは不変化詞 *out* である（より正確には、これらの言語では側置詞や格標識を含む文の非中核部が経路を表現する。Matsumoto 2003 を参照）。

この類型の違いは、移動事象を言語化する際の各意味要素への注意・選択に一定の影響を及ぼす (Slobin 1996, 2000 など)。たとえば、衛星枠付け言語では、動詞枠付け言語よりも、移動様態（移動を構成する手足の動きや姿勢、移動手段など）を表現する頻度が高いことが指摘されている。これは次のように説明される。衛星枠付け言語では、移動事象に必須の意味要素である経路の情報を主動詞ではなく付随要素で伝達するため、主動詞によって様態を表現するのが容易であるのに対して、動詞枠付け言語では、主動詞が経路を表現する役割を担うので、様態情報を伝えるためには何らかの随意的な要素をわざわざ使わなければならない。その結果、動詞枠付け言語では、移動様態が注目に値しない場合には表現されづらい傾向を示す。

1.2 直示情報の表現頻度

移動における直示情報、つまり話し手への移動か、話し手から離れる移動か、そのどちらでもない中立の移動かという情報についても、どれをどのくらい表現するかは言語により異なることが知られている（古賀 2016, 2017 など）。通言語的に話し手への移動は表現されやすい一方で、それ以外の直示情報の表現頻度は言語により大きく異なる。たとえば、日本語、ネパール語、タイ語などでは、直示情報は種類にかかわらず高頻度で表現されるが、英語、中国語、モンゴル語などでは、話し手への移動でない場合には言及頻度が大きく下がる。ここに挙げた言語のうち、日本語、ネパール語、モンゴル語は動詞粹付け言語、タイ語、英語、中国語は衛星粹付け言語とされるものであり、Talmy の類型論と直示表現頻度の高低は対応しないことがわかる。古賀 (2016) はこの違いを、直示情報専用の統語スロットの有無、直示情報への注目の一貫性などの観点から分析している。

たとえば、英語の直示表現頻度が日本語に比べて低いのは、おもに直示専用の統語的スロットが無いことに由来する。日本語では、(2a) が示すように、テ形や連用形（一種の副動詞）を用いて様態と直示を表すスロットを増やすことができる。いっぽう英語では、主動詞の位置をめぐる直示と様態が競合する。また、「歩いて」のような、「走って」や「スキップで」に比べて普通の移動様態についても一貫して注意を向け、主動詞で表現する傾向がある。つまり、主動詞をめぐる競合に勝つのは様態であり、直示は (2b) のように省略されるか、(2c) のように前置詞句で表現されることになる。話し手への移動以外の直示情報は、実際には (2b) のように省略されることが多い。これは、移動の必須の意味要素でない直示情報を、前置詞句のような随意的要素で表現することには余計な認知的負荷がかかるため、特別な場合（話し手への移動）でなければわざわざ表現しない、ということだと考えられる。

- (2) a. 友人が休憩所の中に走って入って来ました。
b. The man skipped up the steps.
c. The guy walked up the stairs **away from me**. (古賀 2016)

しかし、直示専用の統語的スロットがあっても、すべての直示情報を表現するとはかぎらない。中国語は (3) で例示するような動詞連続を利用して、様態、経路、直示を表現するスロットを増やすことが可能である。

- (3) *Péngyou zǒu jìn xiūxitíng lóu.*
friend walk enter pavilion come

‘My friend walked into the pavilion toward me.’ (古賀 2016)

ところが、中国語では話し手への移動以外の直示情報にそれほど一貫した注意を向けず、表現しない傾向がある。これは、日本語と同様の副動詞構文を持つモンゴル語にも当てはまる。

古賀 (2016, 2017) はこのような日本語と中国語、モンゴル語との違いを、各言語の主体性 (Langacker 1985 など) の違いによって説明する可能性を提示している。直示移動表現は発話者と発話の場を意味に含む主体的表現の典型であり、話し手は言語化しようとする状況の中に視点を置いて、自分との関わりから移動事象を表現することになる。Uehara (2006) が示すように、このよ

(7) a. 「行く」

話し手または他者が話し手のホームベースを出発して動く。その動きを話し手が出発点から眺め、描く。

b. 「来る」

話し手が自らのホームベースに位置し、話し手または他者の動きをその場所（到達点）への動きとして眺め、描く。

日本語では他者の移動について直示動詞を主動詞とする表現が好まれるという事実と、この大江の説明とを合わせると、日本語における話し手自身の移動の表現について次のような予測が成り立ちうる。他者の移動について直示動詞を用いて表現する傾向があるということは、その移動の到達点または出発点にいる観察者の視点から、すなわち移動事象の内部からその移動を表現するということである。このとき、話し手は表現対象である移動事象の一部を構成すると同時に、表現主体でもあり、話し手の自己は二分する必要がない。ところが、話し手自身の移動を直示動詞で表現するためには、表現主体である自己（到達点または出発点にいる自己）と、表現対象としての自己（移動者としての自己）を分けなければならない。このような自己の二分を避けるのであれば、直示移動動詞を用いることはできず、話し手自身の移動を表現するには直示動詞が主動詞となる頻度が低くなると予想される。この予想を、動画刺激を用いた実験によって検証した。

3. 実験とコーディング

同一の移動を、移動者自身の視点と、移動者を観察する他者の視点から撮影して、2種類の動画を用意した。図1にその一部を示した動画では、ある人物が机の脇を歩いて通り過ぎ、また戻って来る。もう一方の動画では、ある人物が階段を上り、部屋のドアまで歩いて鍵を開け、部屋の中に入る。移動者の視点（左）では、カメラの位置は移動者に合わせて動き、映像は移動者の見えの変化に対応したものとなる。いっぽう他者の視点（右）では、カメラは基本的に位置を変えずに、移動者を客体として捉える。

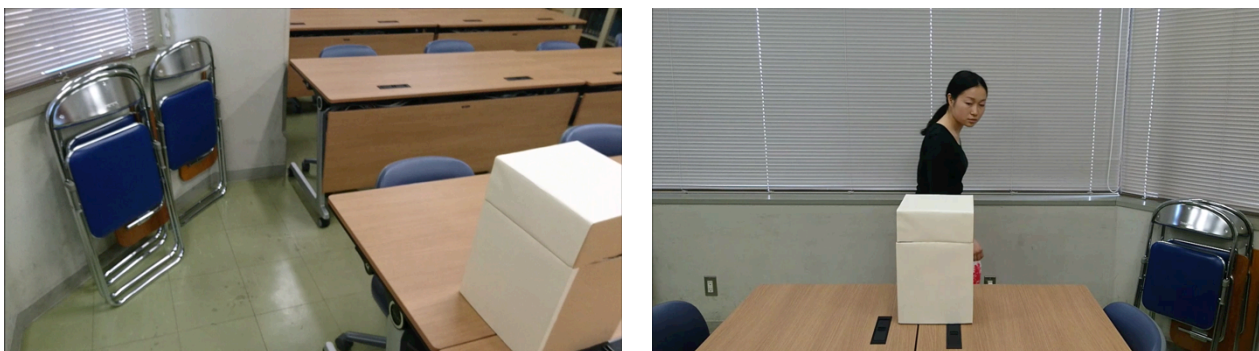


図1. 2つの視点の例 左が移動者の視点、右が他者の視点

実験参加者は14名の日本語母語話者で、いずれも東京大学の学生である（男性9名、女性5名）。

この14名を7名ずつAとBの2つのグループに分けた(A=男性4名, 女性3名, B=男性5名, 女性2名)。Aグループには移動者視点の動画を, Bグループには他者視点の動画を提示し, 日本語で2度の口述描写を求めた。具体的には, 参加者は, その場にいるつもりで(カメラを自分と同一視して)動画を見るよう指示され, まず動画を見ながら状況を描写する(実況)。さらに, 動画を停止したあと見た内容をもう一度描写する(再話)。

得られたデータから, 移動を表現している節を抽出し, その主動詞に直示移動動詞「来る」または「行く」が使われているかどうかをコードした。「上って来て」「歩いて行って」のように, 直示移動動詞が補助動詞的に使われている場合には, 一つの節としてコードした。「踊り場を通過して教室に入ろうとしました」のように, 2つの継起的な移動を表すと解釈できる場合には, それぞれ一つの節としてコードした。

4. 結果と分析

直示動詞が移動を表す節の主動詞となる頻度は, 表1の通りであった。表1aでは実況と再話を合計して, 表1bと1cでは実況と再話を分けて示している。全体として見た場合にも, 実況と再話を分けた場合にも, 移動者視点の場合には直示動詞が主動詞となる割合が少ないことが分かる(図2を参照)。

表1. 移動を表す節の主動詞

	a. 全体			b. 実況			c. 再話		
	直示	非直示	合計	直示	非直示	合計	直示	非直示	合計
移動者視点	17	29	46	8	21	29	9	18	27
他者視点	33	18	51	16	7	23	17	11	28
合計	50	47	97	24	28	52	26	29	55

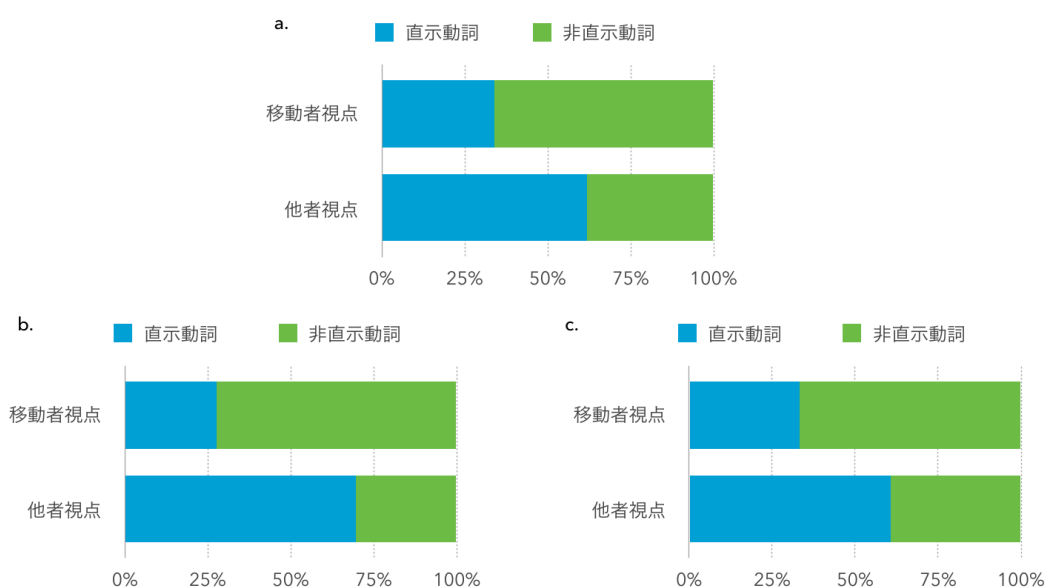


図2. 直示動詞と非直示動詞の割合 a. 全体, b. 実況, c. 再話

また、データ解析ソフト R を用いてフィッシャーの正確確率検定を行ったところ、表 2 の結果を得た（小数第三位で四捨五入してある）。直示動詞が主要部となる頻度は、特に実況の場合に、移動者視点と他者視点の間に、有意水準 5% で差があった。いっぽう、再話の場合に限ると有意差は認められなかった。

表 2. フィッシャーの正確確率検定の統計値

	<i>p</i> 値	オッズ比	信頼区間
全体	.008	0.324	0.128 - 0.791
実況	.005	0.173	0.042 - 0.641
再話	.060	0.331	0.093 - 1.107

5. まとめ

全体として見れば 2 節で述べた予測が正しいことが確かめられた。つまり、日本語話者は自身の移動を表現する際に、第三者の移動に比べて主動詞で直示動詞を使いにくい。このことは、日本語が Uehara (2006) の言う主体的表現を好むことや、「来る」・「行く」に関する大江 (1975) の記述の妥当性を裏付けるものである。ただし、この傾向は実況の場合に限られ、再話の場合には顕著な差は認められなかった。これは、再話のほうが実況よりも「自己の二分」を促しやすいということを示唆している。

参考文献

- 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究 主観性をめぐって』南雲堂 / 古賀裕章 (2016) 「自律移動表現の日英比較 類型論的視点から」藤田耕司・西村義樹 (編) 『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ』219-245. 開拓社 / 古賀裕章 (2017) 「日英独露語の自律移動表現 対訳コーパスを用いた比較研究」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』303-336. くろしお出版 / Langacker, R. W. (1985) Observation and speculations on subjectivity. Haiman, J. (ed.) *Iconicity in syntax*, 109-150. Amsterdam: John Benjamins. / Matsumoto, Y. (2003) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. Chiba, S. et al. (eds.), *Empirical and theoretical investigations into language*, 403-418. Tokyo: Kaitakusha. / Slobin, D. I. (1996) From “thought and language” to “thinking for speaking”. Gumperz, J. & Levinson, S. (eds.) *Rethinking linguistic relativity*, 70-96. Cambridge: CUP. / Slobin, D. I. (2000) Verbalized events: A dynamic approach to linguistic relativity and determinism. Niemeier, S. & Diven, R. (eds.) *Evidence for linguistics relativity*, 107-138. Berlin: Mouton de Gruyter. / Talmy, L. (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. Shopen, T. (ed.) *Language typology and syntactic description*, vol. 3, 57-149. Cambridge: CUP. / Talmy, L. (1991) Path to realizations. *BLS* 17: 480-519. / Uehara, S. (2006) Toward a typology of linguistic subjectivity: A cognitive and cross-linguistic approach to grammaticalized deixis. Angeliki, A. et al. (eds.) *Subjectification: Various path to subjectivity*, 75-117. Berlin: Mouton de Gruyter.

謝辞

実験にご協力いただいた伊藤綾乃、梅谷博之、鍛冶広真、林徹（五十音順）の諸氏に感謝します。この実験は科研費（15H05152）の助成を受けたものです。